

6月	★6/22, 23は休診です					
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

★**医院ニュース①** 6月22日(月)、23日(火)は**特**別休日**で終日休診**です。

★**医院ニュース②** 6月4日(木)、6月8日(月)、6月12日(金)は**南箕輪小学校の健診**のため、**12:30**きっかりで**診療を終了**します。午後は通常です。

★**医院ニュース③** 6月9日(火)は**講演会**のため**18時30分には診療を終了**します。



ちょっと怖いコロナウイルス情報 新型コロナ感染症の**重症化パターン**は一般的な肺炎→呼吸不全以外にもいくつか明らかになってきました。(怖がりの人は読まないで右の鳥を見て癒されて下さい)

その①:新型コロナ肺炎に呼吸困難を感じない隠れ低酸素症「サイレント・ハイポキシア(ハッピー・ハイポキシア)」の可能性・・・進行に気づかず悪化 新型コロナ肺炎で**自宅待機中の急死**や、**行き倒れ**などが報道され、不安が広がっています。新型コロナ肺炎の**隠れ低酸素症「サイレント・ハイポキシア(ハッピー・ハイポキシア)」**が原因と言われています。この深刻な事態の防止には、正しい理解に基づく**パルスオキシメーター**の使用が重要な役割を果たします。患者が新型コロナ肺炎にかかったとしても、**呼吸困難感(息苦しさ)**を訴えることが**少ない可能性**があります。そのため、本人が発症に気づかず感染源になったり、医療者も進行に気付かず、「**突然の悪化**」だと感じたりしています。人間に備わった呼吸に関する二つの独立した調節機能、すなわち**「動脈血の酸素を適正に保つ機能」と「炭酸ガスを適正に保つ機能」**のうち、片方だけが働かなくなる場合があることと関係がありそうです。新型コロナウィルスは、気道や肺胞周辺の細胞に入りこみ、**酸素の取り込みを妨害**します。動脈血中の酸素の変化を感知するセンサーは、大動脈や頸動脈に接して存在し、迷走神経や舌咽神経を介して、延髄にある呼吸中枢とつながっています。**ウイルスによりセンサー機能が障害され、身体が酸素不足を認識できない可能性**が生じます。それらの神経経路が、**味覚や嗅覚の経路と共有**されていることも、新型コロナ肺炎との関係を疑わせます。新型コロナ肺炎はSARSとは違い、**細い気道が特に詰まりやすく、重症の酸素不足**になりやすいです。**酸素不足に対応できない**ことは、新型コロナ肺炎特有の病状の一つです。炭酸ガスがたまってしまった慢性肺疾患の場合、炭酸ガスセンサーが機能せず、呼吸の調節は酸素の量の変化だけで行われているため、ほんの少し酸素を吸うだけで呼吸中枢が**十分だと思っ**てしまい、呼吸が止まることがあります。ほとんど心臓が止まるほど、あるいは意識を失うほどの低酸素状態になっても、呼吸困難感を訴えないことがあります。**新型コロナ肺炎**は、まさにこの状態に似ています。**致死的に低い酸素レベルにもかかわらず、普通に携帯電話で話をしていた例も知られています**。その際の頼りは**パルスオキシメーター**です。一見、元気そうであっても、急変が伝えられる新型コロナ肺炎患者の場合、**パルスオキシメーターが連続的に使用されていれば、低酸素状態を早期に発見できた可能性**があります。しかし、そのためには、頻回に検査する事が必要で、**体温計のような一日2回といったチェックでは不十分**です。数値の変化をしっかりと評価できる知識も必要です(一般的には**94%以下は危険**)。**ハッピー・ハイポキシア**に陥っている患者さんの場合、無意識的に呼吸数を早くして、呼吸困難を回避している場合があります。呼吸数は毎分12~20回が正常ですが、**毎分25回以上の頻呼吸**になっている場合は、要注意です。それでも患者さんは、笑ってしゃべっている場合もあります。でもCTではひどい肺炎に陥っていることがあるのです。

その②:新型コロナウィルス性髄膜炎 3月に山梨県の20代男性が、日本で初めて**新型コロナウィルス性髄膜炎**と診断されました。北京でも新型コロナ肺炎患者の脳脊髄液から新型コロナウィルスが検出され、**中枢神経系**

への侵入例として注目されています。ウイルス性脳炎は比較的良好にみられる中枢神経系の感染症です。患者の発症時の臨床症状は**けいれん、意識障害、反応の鈍さ、四肢まひ、髄膜刺激症状**などです。

その③:サイトカインストーム→全身に起こる血栓症 **サイトカイン**とは**細胞から出るタンパク質**で、他の細胞に命令を伝達するための物質です。サイトカインが細胞から血液中に分泌されると、**発熱や倦怠感、頭痛、凝固異常**などが起こります。サイトカインが分泌されるのは**身体を守るため**であり、身体に異常が起きているのを知らせるためでもあります。**新型コロナウイルス感染**が肺に起こり細胞に炎症が起きますと、**サイトカイン**がその細胞から分泌されます。他の細胞に**肺に炎症が起きたことを伝えるのと、炎症を抑えるよう他の細胞に命令**するためです。感染の量が多くなると、炎症の量も多くなり、**サイトカインも大量に放出**されます。それを**サイトカインストーム**と呼んでいるのです。サイトカインストームが起きると、**サイトカイン**による影響が過剰に起こります。先述したように**発熱や倦怠感、凝固異常**が過剰に起こることになり、**全身状態の悪化**や**血栓形成**に繋がります。大量のサイトカインが発生する**サイトカインストーム**により**血液の凝固異常**が起き、**血栓形成**が起こります。それによって**心筋梗塞、肺塞栓、脳梗塞、下肢動脈塞栓**が起こる可能性があります。肺炎の症状が主症状となりもし死亡してしまっても死因は肺炎になりますが、**心臓や肺や脳に血栓があった例は多数報告**されています。 **今年5月の鳥** ↓

